



世界切手展 THAILAND 2018 参観日記



大沼幸雄

1. はじめに

昨11月26日から12月5日まで10日間、家内と共にバンコクへ行き、タイ2018FIP世界展を参観しました。今回は内藤陽介コミッショナーから、荷物も多くかつ審査員兼任で多忙なので、私にセカンド・コミッショナーをしませんかとの話があり、初めてコミッショナーの仕事を引き受けて大変勉強になりました。

2. 99キロの作品を運ぶ (11/26 月)

成田の第一ターミナルへ着いたところ、内藤さんがすでにトランク4個を前に待っていました。家からマイカーで荷物を運び、一旦、車を空港近くの長期駐車場に預けてきたとのこと。それだけで大変な仕事と思いました。やがて伊藤純英さんが姿を現しました。

私(8フレーム)と伊藤さん(16フレーム)は自分の作品を機内持ち込みとし、それ以外トランクで運んだ出品物は18作品109フレームで99キロありました。トランクの上げ下ろしだけでかなりの力仕事です。若さが無ければ無理です。タイ航空のチェックイン・カウンターで4人同時にチェックインしました。重量制限の余力をプールして使い超過料金を極力減らすのが目的です。

乗り込んだタイ航空のTG643便は、ほぼ満席の状態です。料金は一人往復エコノミークラスで72,000円ですから思ったより安上がりです。飛行時間は7時間、バンコクは時差2時間遅れ、成田を正午に出ると現地には午後5時に到着します。出迎えがあり、税関で計量して手続きを終えて、小型バスで一路バンコク中心街へと飛ばしましたが、ラッシュ・アフーもあり、オフィシャルホテルのアジア・ホテルに到着までには1時間以上を要しました。バンコクの11月末は乾季で気温も昼は最高摂氏25度、夜でも17-8度くらいですから絶好の避寒日和です。4個のトランクを内藤さんの部屋に運び込んで第一日目を終えました。

3. 133フレームの掲出作業に四苦八苦 (会期前日 11/27 火)

作品の会場への搬入日です。マイクロバスがホテルから会場のサイアム・パラゴン迄トランクを運んでくれました。全体の2650フレーム(ニューヨークは約4000フレーム)のうち、作品の多い順では、当然第一位がタイで177フレーム、第二位日本133フレーム、第三位中国128フレーム、第四位インドネシア115フレームで、100フレーム超は、この4ヶ国のみです。ホスト国タイの一位は当然として、ゲスト国の中では、日本が第一位でした。掲出作業は、内藤さん、伊藤純英さん、小生の3名で行いました。133フレームは、協会のミニベックスの3倍の規模です。それが1か所に集中しているならともかく、広大な展示場に散在しているので、一か所の作業を終えたら



写真1 掲出作業中の内藤さん(手前)と筆者(奥)

移動してまた作業です。広大な展示会場を展示番号たよりに探し回るわけで、それだけで一仕事です。更に問題は、日本のフレームと違い、貼り終わるとアクリル板を一枚一枚運んで来て、それでカバーしてネジで止める方式です。運搬員と電動ネジの作業員が必要です。その作業員の絶対数が不足しているので、取り合いとなります。それも折角捕まえたと思ったら未熟なアルバイトだったりして1フレームを固定するのに30分位かかり一苦労します。折角、熟練の作業員が来てホッとしていても、うっかり目を離すと、他国のコミッショナーも鵜の目鷹の目で狙っているののでいつの間にか連れ去られることもありました。このあたりは家内が見張り役をしてくれたので助かりました。悪戦苦闘の末、午後1時頃から始めた掲出作業が完了したのは午後6時頃でした。これは結構な重労働でした。私がFIP公認の国際展に出展したのは11年前のバンコクFIAP展でした。その時も会場はサイアム・パラゴンでしたが、係の人たちが効率的に動くのに感心したものです。当時と比べ非効率な印象を持ったのは、郵政主催から民間主体へと替ったことが影響しているのかもしれませんが。この日はあまりにくたびれたので、ホテルの部屋で、「どんべえ」とシンハ・ビールで食事をすませ、バタン・キューと寝込みました。

4. 会場は屈指の大型ショッピングセンター (会期初日 11/28 水)

いよいよ11月28日が世界展の開幕日です。会場になったサイアム・パラゴンは、2006年にオープンしたバンコク中心街にある屈指の大型ショッピングセンター。地階は、エルメス、ルイ・ヴィトン、プラダ、ブルガリ等の高級ブランドのブティックが勢揃いし、2階・3階は、レジャー関連、高級生活雑貨の専門店が並び、4階と地下1階には、様々なエスニック料理を集めたフードコートがあります。このビル5階の“ロイヤル・パラゴン・エグジビション・ホール”が世界展の会場です。最寄りのサイアム駅は、宿泊ホテルのラチャーティウィー駅からわずか1駅です。とても便利な立地です。

10:00のコミッショナーの記念撮影に間に合うように電車で会場へ着き、厳重なセキュリティ・チェックを抜けると、会場前のホー



写真2 シリントーン王女肖像と自筆の絵葉書コレクション

ルには新国王の写真とやや奥にはシリントーン王女の写真と王女のコレクション展示会場が設営され、右手壁に沿ってコート・オブ・オナーの名品がずらりと並んでいます。ドアを抜けて会場に行くと、昨夜8時頃には未だ6割程度であった展示会場のフレームが全て掲出され、準備もまだらであったディーラー・ブースも整然としていてびっくりしました。一夜のうちに準備万端整った感じです。

定刻になり、先ず審査員グループ THAILAND2018と大書したパネルを背景に記念式典の壇に4段に並び記念撮影をします。総勢60名位でなかなかの壮観です。ドレスコードでは上着・ネクタイの着用が義務付けられています。例外は内藤さんの和服で、ひときわ目立つ存在です。引き続きコミッショナーが全員記念撮影をしました。

このあたりから審査員として参加した井上和幸さん、内藤さんは審査で大忙しでして、審査員室に充てられたピン・ルームに閉じこもっているの、部外者は立ち入りできません。コミッショナー・ルームに集合すると、点呼があり、ひとひとりにFIPのピン・バッジが配られます。これはオフィシャルの証明なのですぐ胸に着用。明日の鑑定の手続きに



写真3 壮観な審査員全員の記念撮影

つきエキスパート委員長より詳しい説明があり、細大聞き漏らさない様に緊張しながらメモを取ります。展示物のうち鑑定を要するものは、フレームから取り出して鑑定し、コメントをつけてフレームに戻すが、それには必ずコミッショナーが立ち会うことと渡されます。鑑定結果は二種類あり。第一は、問題なしで無罪放免、第二は、次回の出展の際には、鑑定書の提出を義務付けられ、提出しない場合はメダルが1ランク下がるなどのきついお達しがありました。

コミッショナー・ルームの後方には、各人の名前が記されたメールボックスが用意されています。ここには各国のコミッシーナーが持参したお土産が入れてあり、パーティへの招待状も入っています。お土産は、切手のシート、FDC、ステーションナリー、中には拡大鏡、人形のキーホルダーなどありお国柄が出て楽しいものです。

少し時間があつたので展示会場を回ると、元ロイヤルの会長のキングさん、FIPテーマティク委員長のスハドルクさん、FIP役員のヒメネスさん、ナタニエルさん、ボーイスカウトでチャンピオン・クラス出展のスレッターボさんなど旧知の人々が次々と姿を見せ、挨拶を交わします。

5. 開会式には華麗な宮廷仮面劇

午後3時になりオープニング・セレモニーが開催されました。最初に宮廷の仮面劇のショウが披露されました。金ぴかの豪華絢爛な衣装に身を包み仏塔をかたどった冠や仮面をつけた少年・少女たちが「指先の芸術」を披露してくれ、思わず目を奪われます。続いてタイ郵趣協会会長のプラコフさんの挨拶、デジタル社会経済省（タイ・ポスト所管官庁）副大臣の演説があり、続いて同副大臣、テイさん、タイ・ポスト総裁（女性）、プラコフさん、組織委員会幹部の5名が登壇し Thai2018 の記念切手5枚の大写しを手に持ち、直径50センチほどの大きな記念印を重ねて持ち上げ押印しオープニングの式典は終



写真4 宮廷仮面劇の少年たちと

会期二日目 (11/29 木)

会期2日目の11月29日には、午後2時から鑑定を要するリーフのリストが発表され、日本からも2件が該当、鑑定委員会の委員に立ち会い、当該リーフを取り出し渡すと共に念のため写真をとりました。午後5時になり鑑定結果



写真5 “鑑定中”の張り紙をする作業員

が発表され、1件は無罪放免となり、もう1件は、次回の出展時に鑑定書

を提出すべしとの判定結果です。書類は3部で、一部は鑑定委員会へ、一部は出品者へ、一部は出品者の所属団体へということで、コミッショナーが確認のサインをしました。最後は、再度作品のフレームへ鑑定委員と赴き元のフレームに戻して作業が完了です。

6. 想定外のハプニング、そして地獄に仏

いざホテルに戻ろうとした矢先に携帯が鳴り「内藤ですが、至急相談したいので、コミッショナー・ルーム前に来てほしい」とのこと。慌てて戻ると「実は、大沼さんの作品がグランプリ・ドナーの候補に上ったので、明日、推薦演説をしなければならない。ついては明日朝までに英文原稿を作ってほしい」とのこと。つまりチャンピオン・クラス10作品の中から3作品に絞った候補の一つに推挙されたということです。まったく想定外の事態の展開に驚きました。一瞬、何を書くかすぐに思いつかず、自分の作品をカメラに収め、次いで会場内のパソコン・ショップに駆け込んでUSBメモリを買い、ホテルに飛んで帰りました。大切な時に悪いことは重なりがちです。ホテルで「ビジネス・センターがあるか」と尋ねると「ない」とのこと。「印刷は」と訊くと「メールで文書をホテルの事務室に送れば印刷します」とのこと。ところが持ち込んだデルのパソコンは、もうポンコツで通信が繋がらず、使える機能はワープロのみ。原稿をUSBに入れて事務室で印刷しようとしたが、実は、買ってきたUSBが2個とも

なぜか小生のパソコンでは動かない。万事休す。その夜は組織委員会の歓迎パーティがアジア・ホテルの大広間で開かれているので、その席上、内藤さんのUSBメモリを借りる事にし、作業を早く開始せねばと焦りました。幸い審査員の井上和幸さんも出席していて「推薦スピーチのひな形もあるし、実は小型プリンターも部屋に用意してある」とのこと。まさに「地獄に仏」でした。

気もそぞろでパーティを早々と切り上げて部屋に戻り作業を始めました。ここで助かったのはシノプシスです。毎回シノプシスを出していますがそのコピーがファイルに有り、それを活かすことができました。パソコンの不具合もありイライラしましたが夜遅く11時頃まで掛かり何とか第一稿を仕上げました。疲れて一旦ベッドに入りましたが、突然、ひらめいて「ああそうだ。あれを入れねば」と思い立ち、夜中の2時頃から再度手を入れ、読みやすい様に原稿を太文字14ポイントにして仕上げ、午前3時頃やっと寝付きました。

会期三日目 (11/30 金)

朝6時半にモーニングコールで目覚め、寝ぼけ眼をこすりながら、迷惑をも顧みず、井上さんの部屋をノックし印刷をお願いしました。井上さんは、前回、このホテルへ宿泊したときに情報機器が無くて往生したので、それに懲りて今回は携帯用の小型プリンターを持参したとのこと。やっと出来上がった原稿を、ブラックファースト・ルームで内藤さんに渡し、簡単な打ち合わせを済ませて、よろしくお願いしました。午前中にグランプリ候補の推薦演説があり、投票が行われるが、開票はパルマレスの最後に行われるとのこと。



写真6 FIPテーマティク委員長のスハドルクさんと

この日午前中にコミッショナー・ルームでは、コミッショナーの名前が一名一名読み上げられ、大会会長のプラコフさんから、全員に名前入りのメダルが授与されました。ご苦労様という御印でしょう。金色の直径7センチほどの立派なメダルで、前面にはエメラルド寺院、仮面をかぶった守護神、王室御座船の舳、国花「ドーク・ラーチャブルック」、裏面にはタイ一番切手を配した郵趣協会のマーク、タイ2018年のロゴ・マークがデザインされています。その後、「パルマレスでは、入賞者全員へのメダル授与式があるので、各国で出席可能な受賞者のリストを提出してほしい」との要請があり、パルマレス出席者リストを提出しました。少し時間の余裕があったのでテーマティク作品、ディーラー・ブース、コート・オブ・オーナーなどを見て回りました。

夕食は、井上さん、内藤さん、我々夫婦の4人で、サイアム・パラゴン近辺の「SOMBOON SEAFOOD」(建興酒店)にて、シンハ・ビールで乾杯、プー・パッポン・カレーを食べて、あとは名物のマンゴー・ライス(もち米)で締めくくって大満足の夕食でした。

7. いよいよ成績の貼りだし始まる (会期四日目 12/1 土)

この日には展示会場に成績の貼りだしがありました。テーマティクでは、江村清さんの「芸術家の肖像史」大金銀賞(88点)、嘉ノ海暁子さん「花卉園芸」大銀賞(78点)、オープンでは、荒井照夫さんの「ワグナーの生涯」銀賞(73点)、ワンフレームでは川邊勝さんの「ドラクロワ 十字軍のコンスタンチノーブル侵攻」(80点)の結果でした。

(詳細はJPSウェブに国際切手展のタイ2018の全記録を参照)伊藤純英さんの「昭和切手シリーズ1937-46」、齊藤環さんの「オーストリアとロンバルディア・ヴェチア 1850発行」は、お二人とも国際展で初めての「金賞」で、ご満悦の様子です。



写真7 会場にて(右より:江村さん、荒井さんと筆者)

8. 議論百出のガイドライン改訂 (テーマティク委員会)

11:00よりFIPテーマティク委員長のスハドルクさんによるテーマティク委員会が開催されました。先ず点呼があり、委員会活動のレビューと展望、ジューリー・アカデミー紹介がありました。大半の時間は、「ガイドライン」の改訂の討議にあてられました。FIPには、「テーマティク審査特別規則(SREV)」とその具体的解説の「ガイドライン」があります。今回議論の主題は、「ガイドライン」の加筆・修正案の討議です。スハドルクさんは、この両者を一本化したいとの構想を持っており、たたき台となったのはその統合案です。希少性、状態などに具体的な点数を設けた案には、議論が百出しました。私見ですが、やはりルールはルールとして定めて置き、ガイドラインは解釈として時代の変化に合わせて弾力的に変えるのが筋だろうと思いました。勿論、ルールも改訂が必要な事態が起きれば変えるのは当然ですが、基本的な枠組みは安易に変えない方が良いと思います。最後に「重ね貼り」に関する考え方の説明がありました。少し分かりにくい解説でしたが、重ね貼りが許容される場合として次の3ケースだろうと理解しました。(1)隠れる部分が郵趣的要素ではない事。(例:住所、白紙部分等)(2)ステーションナリーで、同種でカシエ部分を並べてみせる場合、(3)電報、

V-Mailなどで中身を見せるためにカバーを覆う場合です。スハドルクさんは、基本的にマテリアルの重ね貼りは良くないという立場とされていました。

午後になり荒井照夫さんが会場へお一人で元気な姿を現しました。タイへはご家族とご一緒に来られた由。85才と言う高齢での初の国際展で、英文化など御苦労が多かったと思われる。その一途なチャレンジ精神は郵趣家の鑑と言うべきでしょう。自分の真向かいに大金賞を得たデンマーク人のオープン作品があり、その凄さに目を見張っていました。午前中に奥さまとご一緒に来られた江村清さんが、再度お一人でお見えになり3名で記念撮影をしました。江村さんは、2年前ニューヨークでは83点と一旦金銀賞に下がった作品をバージョン・アップして出品。88点の大金銀賞への復帰を果たしてお喜びの様子です。

この夜は、来年武漢で開催のFIP世界展（6月11日～17日）プロモーションのパーティがあり、コミッショナー、審査員などが全員招待されました。中国郵政幹部による中国語の演説、プロモ・ビデオの放映があり、中国の急激な経済発展ぶりに目を奪われました。2019年は中華人民共和国建国70周年の節目の記念行事です。すでに内藤さんがコミッショナーとなることで決まっています。

9. 2021年日本でのFIP世界展が決定 (会期五日目 12/2 日)

この日はFIPのコンGRESが開かれ、次期FIPの会長選挙ではオーストラリアのベストン氏が会長に選任されました。テイさんは名誉会長として引き続き大所高所からアドバイスするとのこと。また日本郵政が正式に2021年の世界展（8月～9月、会場未定）の申請がなされ承認されました。

我々夫婦は、やっと一日フリーとなり、ジム・トンブソンの本店へショッピングに行き、その後、タイの名門大学チュラーロンコーン大学の政治学部・経済学部を見学しました。広大な

敷地内に白壁にレンガ色の屋根のタイ風の堅牢な校舎が、緑豊かな大木に囲まれて点在しており、恵まれた好環境です。お昼なので学生食堂へ行くと、まるでアジアのフード・コートのようにいろいろなエスニック・フードが選べます。ガパオ・ライスとスイーツを食べると50バーツですからわずか200円で結構おいしいランチにありつけました。開放的な建物で、ハトや雀が入ってきて餌をついばみヒョコヒョコ歩きをする光景は、とてものかな雰囲気です。構内では、たまたま日本語の検定試験が行われており、学生のみならず一般の人も受験に来るとのこと。事務局の人たちに話かけると全員流暢な日本語でびっくりしました。タイでは日本語の合格レベルにより、日系企業での給与が異なるそうで、受験生は必死で頑張るとのこと。タイにおける日本企業の存在感の大きさをあらためて痛感しました。

いよいよパルマレスです。会場はアジア・ホテル内のグランド・ボール・ルーム。コミッショナーは招待状（通常価格100米ドル）を2枚頂けます。ドレスコードにはラウンジ・スーツまたはナショナル・ドレスとあるので、黒っぽい縞の背広に明るい色のタイを着用しました。会場へ行くとヨーロッパ人はフォーマルに近い蝶ネクタイの人が少し居たが殆どは普段着の背広にタイです。和服の内藤さんは、中ではひときわ目立つ存在。30分位前に行ったのですが、延々の行列で、中に入



写真8 パルマレス会場にて（左より：吉田敬さん、菊池さん、和服の内藤さん、筆者夫婦）

った時はすでに前方の円形テーブルは席が埋まっています。内藤さん、菊池恵美さん、オランダ、ノルウエー、デンマークのコミッショナーと我々夫婦で止む無く右端の後方テーブルに陣取りました。テイ前FIP会長の退任の挨拶とベストン新会長の紹介があり、朗々たるテイさんの「ムーン・リバー」で、いやが上にも祝賀ムードが高まってきます。出席中の入賞者は全員壇上に登る段取りとなっており、次々名前が読み上げられました。いよいよチャンピオン・クラスが読み上げられ7名が登壇し審査員長のゴングヴァターナさんから金色のメダルを頂く。これはダミーで壇を降りるときには一旦返却し、名前を掘り込んだ本物は後で頂くとのこと。

10. 3つのグランプリは伝統部門が独占（パルマレス）

いよいよグランプリの開票時間です。三種類あり。グランプリ・ナショナルは無競争でクリシュナマーラさん（タイ）「サイアム：ラーマ四世と五世（1837-1904）」、グランプリ・インターナショナルは、5候補からタンさん（シンガポール）「切手以前時代の海峡セツルメントから1900年まで」が選ばれました。グランプリ・ドナー候補は、ウィットセンさん（デンマーク）の「スエーデン（1855-1872）」、ヴォルさん（モナコ）：「ジュネーブ郵政（1939年～1962年）」と小生の「ベートーヴェン：その生涯と遺産」

の3名。3候補の名前が呼び出されひな壇の下で並んで待つと、壇上に用意された小机の上で、2日前に投票された封筒が開かれ集計が行われます。いよいよ劇的なモーメント到来です。開票結果は、想定通り伝統部門で「スエーデン1855-1872」が第一位で見事グランプリ・ドナーを手に入れました。これでバンコクでの3グランプリは全て伝統部門が手に入れたこととなります。私の記憶する限りテーマティク作品がFIP世界展でグランプリ候補の上ったのは、ダミアン・レーグさんの「鳥に魅せられて」がKorea2014、Singapore2015の2回です。それもグランプリ・インターナショナルですから、自信はありませんが、テーマティク部門がドナー候補に上がったのは史上初（？）のことではないかと思います。とすれば大変名誉なことだと思います。投票結果は、小生には、ぎりぎり二けた台に乗り第2位であった由。投票権は審査員が持っています。エキスパート、アブレンティスを除くと審査員は45名で、うち伝統・郵便史が27名、テーマティク6名、ユース・文献・1フレーム等12名ですから、国会での自民党vs立憲民主党みたいなもので、集票力の差が歴然です。テーマティクの6票を頂いたと仮定して、それ以外からも同じ位の票数があったらしく、もって瞑すべしと思いました。開票前から「投票したよ。結果は、意外と分からないよ」とか「無理でしょう」と言ったら「いやいや、わからないよ。ダミ

アンの時（註：GPインターナショナル）はたった3票差だから」などと励まされたりした。年末になりFEPA会長のモレノさんからお祝いメールが来まして「歴史的なこと」とも言われたので、今回の出来事は、私個人の成果と言うよりは、「テーマも頑張っ



写真9 審査委員長のゴングヴァターナさんよりメダルを頂く筆者

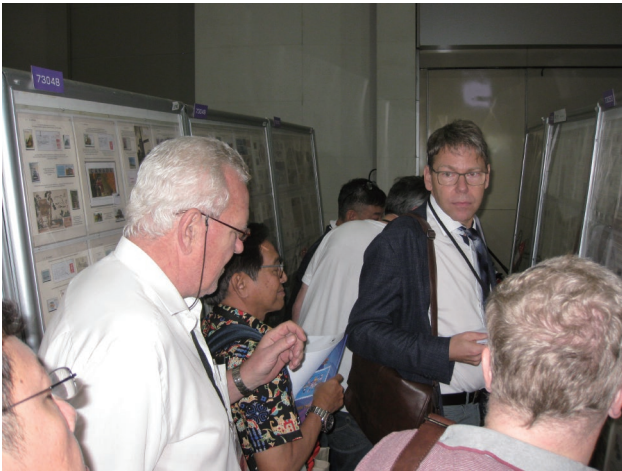


写真10 賑わうテーマティクのジュリー・アプレーザル会場
(左：クンツさん、右：シュミットさん)

11. ジュリー・アプレーザルに耳を傾ける (会期六日目 12/3 月)

この日はジュリー・アプレーザルです。競争展にとっては、これが貴重な情報源です。審査員はひっぱり尻で大忙しです。中には、コミッショナーで自国の複数の作品の講評を聴く人もいて、そろそろ空いたかなと思うと、審査員を次々と引き回すのでなかなかつかまりません。何とか頑張って江村さん、嘉ノ海さん、荒井さん、川邊さんの作品のコメントをもらうことができました。川邊さんご夫妻は、会場にお見えになったので、概要を伝え、詳しくは審査員から直接に聴いて頂くことにしました。

午後3時にはシリントーン王女臨席の閉会式がある。それまでの間少し時間があるのでテーマティクの作品の傾向を把握するために、紙のサイズ、色、テキストを書く位置などを調べてみました。またオープンに珍しくLG作品がでました。デンマークの破天荒な人生を送った国王がテーマで、非郵趣品にも手紙のオリジナルなどふくまれ「これぞオープン作品」との印象でした。

12. シリントーン王女臨席の閉会式

午後3時の王女を迎えるための準備として、先ずグランプリ3作品が会場外に設営されたフレームに移され、式典会場には特別席が設けられます。制服の郵政幹部、切手展役員が前方に着席し、後ろにコミッショナー、ジュリーが着席して静かに王女の来臨を待ちます。定刻になり王女が姿を現し、幹部たちが拝謁の後、グランプリ受賞者3名それぞ

れにメダルを手渡しました。その後ゆっくりと会場前のホールのみを一巡し自分のコレクションの展示、グランプリの3作品、コート・オブ・オーナー（稀少品の特別展示コーナー）をご覧になり約1時間で儀式は終了しました。一切写真撮影は禁止です。思えば11年前にバンコク2007年FIPアジア展に出展（金銀賞）した時にシリントーン王女がお忍びで会場にお見えになり、小生の作品の前でベートーヴェンがゲーテに会った時のことをお尋ねになりました。王女自身が切手コレクターですから個人的に関心があったのでしょう。その時に失礼を顧みず小生と二人の写真をお願いして撮った写真が「郵趣」に載ったことを懐かしく思い出しました。

このように毎日追われるように忙しい日々を過ごし、あっという間に最終日となりました。17:00から一斉に取り外し作業が始まります。勿論、これもコミッショナーの責任です。帰国の早い便の人を優先し、日本の作業開始時刻は19:30とのこと。その間BIN ROOM で待って、全員のメダルと賞状を受け取ります。チェックしたところ1個のメダルは不要で返還、4個のメダルにカラーの誤りがあったので返却して、後日、送って頂くことになりました。幸い撤収にはご自分で作品を持って帰る方々が多数手伝ってくださったので意外と早く終わりました。組織委員会が手配してくれたミニバンに荷物を積み、全員一旦アジア・ホテルに集まり、そこで展示品、賞状、メダルを各人にお渡して別れました。



写真11 取外し作業を終えて一息いれる皆さん
(左より：立川、斉藤、伊藤（純）、内藤、筆者、伊藤（文）、
岩崎ご夫妻—敬称略：ピン・ルームにて)



写真12 「王室御座船博物館」へ船で到着

12月4日（水曜日）全て終わりこの日一日はバンコク見物と決め込んでいたのですが、すっかりくたびれてしまい午前中はゆっくりと休み、午後から王室御座船博物館を見学に出かけました。定期便には間に合わず車と船をチャーター（約1万円）してチャオプラヤー川を20分ほど遡り博物館に到着。工芸職人たちが彫刻と彩色を施しているのを見学。

夜は、マサスタンプスの山本代表、内藤さん、我々夫婦の4人で、山本さんご推薦の「スクンビット・フカヒレ」で珍味とシンハ・ビールで乾杯しバンコク最後の夜を楽しみました。12月5日は早朝に組織委員会が手配してくれたミニバンで、来た時と同様に内藤さん、伊藤純英さんと我々夫婦4名とも同じ便で一路空港に向かい、無事帰国の途に着きました。

今回は、コミッショナーとして仕事とその裏方としての苦労がよく理解できたこと、さらにはテーマチック作品でグランプリ・ド・ヌールの候補に推挙されるというクリスマス・プレゼントがあり最高の旅となりました。

以上（2019年1月8日記）



写真13 館内で舳の彫刻を修理する職人たち



写真14 金箔を貼る職人たち



写真15 内藤さん、本当にお疲れ様でした。
（成田空港にて）